

## 慶尚南道窯跡行

満岡忠成

日本の茶の湯で古來賞玩されるいわゆる高麗茶碗は、韓国の忠清南道の鷄竜山の産（三島・刷毛目）を除いては、そのほとんどが慶尚道及び全羅道の産とみられている。三島・刷毛目は慶尚・全羅両道でももちろん焼かれ、この両者はおそらく高麗茶碗の中でも最もポピュラーなものといつてよいだろう。しかも、鷄竜山・慶尚道・全羅道各地の作は、素地・作風によってそれぞれほぼ鑑別できるのである。

高麗茶碗は主に李朝時代の窯の産であるが、彼国ではこれらは雑器であるため、その窯については識者から看過されていたのを、日本の茶の湯との関連で始めて日本の研究家から注目されるようになった。その皮切りとなり、かつ最も広汎に調査されたのは故浅川伯教氏であった。それは昭和初めからであるが、この頃はまたちょうど鷄竜山窯跡の発掘も始まっていた時代で、ことに昭和二年に朝鮮総督府の手で組織的な発掘調査が行われ、その報告書が発表されることもあって、日本人の研究家の間で李朝窯跡への関心はいよいよ高まったのである。

戦前の在鮮日本人の間にも茶の湯に関連のある李朝陶器の愛好者は多く生れたようで、彼らは発掘品に即して熱心に研究し、多くの貢献をしたことは疑いないようである。たとえば、三島・刷毛目・無地刷毛目・堅手・粉引などに関して、その明瞭な特色の点から、大した異論も起り得なかった。しかし、井戸やそば・斗々屋・伊羅保・柿のへたなどの、高麗茶碗の中でも殊に興味の深い類に関しては、彼らのほとんどが伝世のオリジナルを不幸にして知らなかったために、幼稚な誤認に基づく謬見がしばしば流布された。

浅川伯教氏の多年発掘蒐集された陶片は、調査資金を援助した彩霊会々員のそれぞれに配分寄贈されたが、それを通観してもほとんど普通のもの許りで、前記のような類のものは見かけない。結局、高麗茶碗の粹ともいふべきものに関して、今日でも依然として、推定ないし想像に止まるだけである。

たとえば、晋州地方の窯では、熊川釉こまがえのような細かい貫入のある、やわらかい釉調のもの、いわゆるやわらか手が焼かれ、この釉がまた古薩摩の火計り手のそれでもある、という推測を確かめるには、百聞一見に如かずで現地での眼で見るよりない。井戸にしても、伊羅保にしても、そばにしても、みな然りである。

そんな思いで、私はかねて機があったら、ことに慶尚南道や全羅南道の李朝窯跡を、自分の足で訪ねてみたいと念願していたが、好機到来で、前に芦屋滴翠窯にいたことのある池内義浩君が、今度釜山附近の窯で彼地の伝統を踏まえつつ民芸風なクラフトを焼くことになり、その参考として各地の窯跡を研究調査するのに誘われて、酷暑の候であったが、清水焼の陶匠で何度も渡韓作陶もしている森岡嘉祥君も同行することになって、八月初めに出かけた。

今日でも韓国の至る処で見かける最もポピュラーな陶器といえば、例のキムチを漬けるオンギーという甕である。地方によって多少形に変化はあるが、素朴な姿に光沢のある黒釉釉がかかったオンギーが、農家の軒先に並んでいるのは壯観である。まさに生活の実体そのものに直かにふれた感じである。これは町といわず、村といわず、家々に必需のものだけに、方々で焼かれていて、車を走らせていると、必らず何処かでその窯を見かけるものである。

今度も池内君がこれから仕事をする予定の金海郡進礼面の梁さんのオンギー窯を見学した。日本の窯では今ではもう珍しい紐造りの手法で成形され、見ていても気持ちのいいほど能率的でスピーディな手馴れた仕事ぶりである。釉も簡単なもので、黒褐の泥をとかした汁の中に浸している。甕はたたき延べであるから、薄くて軽い。数日後、ソウルに近い利川の申さんの窯も訪ねたが、ここは森岡君が作陶する馴染みの処で、戦后新設されたものである。もっぱら観光客向けの高麗象眼青磁や搔落し手を多勢の若い陶工を使って作っているが、これはオンギーと違ってすこぶる手がこんでいる。

李朝窯跡の方は、池内君の友人の鄭さんと趙さんというこの方面に詳しい青年学究が、案内して下さった。ことに鄭さんは、先史学専攻であるが、卒論には慶尚南道における李朝窯跡の研究をテーマとした方で、その調査はすこぶる入念緻密である。各窯について細かくデータを記入したカードを見せられたが、これには敬服した。従来窯跡を探索する向きの方は、発掘品を売って商売する盗掘屋で、この連中は戦前から無数に居り、永年の商売柄、窯跡発見についてはベテランで、散乱した陶片などで見当をつけた附近を、鉄棒で当りをつけて発掘するのである。

彼らはもちろん闇の仕事であるから、窯跡の所在は自分たちだけの秘密にしておくわけで、その結果は少しも表面に知識として表れてこない。鄭さんたちもこういう盗掘屋に知られるのを恐れて、自分たちの知見については厳重に秘匿している。こういう発掘品の流れて行く先きが主に日本人であることは恥しくかつ悲しいことである。鄭さんたちもそのことはよく承知していて、日本人に対しては極めて警戒的であるのは当然である。彼らは戦後の烈しい民族主義的教育によって、祖国の文化財という觀念がすこぶる熾烈である。日本人の安易な考え方は、厳に戒められねばならないだろう。

韓国では日本以上に緑地政策が励行されていて、どの山にも植林が行われ、「絶対緑地」のスローガンが至る処の山々に見かけられるが、その徹底のために、森林伐採禁止令が施行されていて、無断で森林に立入っても処罰されることになっている。現に森岡君なども、利川の申さんの窯で作陶するのに、現地で薪木を入手できないから、わざわざ京都から運んでいったのである。また窯跡などで文化財遺蹟になっている地点にも、無断立入りは厳禁されている。だから鄭さんたちは、私たちが案内して下さる時にも、一々許可証をとって、慎重を期している。その点、事情不案内のせいもあるだろうが、日本人には往々不用意の人のあるのは遺憾である。

最初に案内してもらったのは、金海郡上東面の窯跡であった。ここは洛東江の支流に沿ったところで、車を降りてから、溪流を岩伝いに対岸に涉り、叢を分けながら、小一時間も谷沿いに上った。やがて陶片の散乱したのが目に付きしたが、その辺から上手にかけて、斜面に窯が何基あったものだろうが、陶片はすべて堅手ばかりである。一か所、四、五米にわたって斜面の裾が掘りくずされている。土の色はまだ新しく、最近の盗掘らしいとのことである。

金海といえば、金海堅手といって、堅手の本場である。高麗茶碗の堅手は、ほとんど金海の産と、いっていいくらいである。根津美術館の有名な雨漏り堅手はじめ、知られた古堅手の類は、大てい金海堅手といっていい。御所丸もこの窯である。猫掻きのある薄手のいわゆる金海は、古堅手や御所丸よりは時代が下るが、もちろん金海産である。余程焼いて輸入されたものか、月並な堅手に至っては、三島・刷毛目よりもむしろ量の点では多い位である。

金海の窯は、これ以外にも無論まだ幾つかあったわけだろうが、この窯もその有力な一つであったことは疑いない。ただ表面採集の陶片だけでは、余り古い手は見かけぬようで、おそらく発掘によって発見されるのであろうが、かなり規模も大きく、継続して焼かれたようである。

「李朝世宗実録地理志」所記の官窯には金海も挙っており、釜山に近い点からも大いに注目されるものである。陶片の幾つかに、淡紅あるいは淡紫の美しい火替りのあったのは、この手が堅手茶碗としてその景によって賞玩されているので、興味が惹かれた。

金海の次は梁山を訪ねたが、これも前記地理志所記の官窯の一つで、釜山に近くこれまた注目すべき窯である。かねてこの窯では楡垣彫りの彫三島茶碗が焼かれたなどと聞かされていたので、私には特に関心が深かった。梁山の窯も幾つかあるらしいが、案内されたのは、梁山郡東面法基里の窯であった。ここは史蹟第百号に指定されていて、法基里陶窯々址の碑が建っていた。鄭さんたちが地表を少し採拾したが、多いのは堅手で、中に呉器茶碗によく見る撓高台風のがあった。梁山ではもう一つ、同郡勿禁面楡谷里の窯跡を訪ねたが、これも堅手が多かった。金海の上東面のときも、仲々の難コースであったが、この窯もそれに劣らぬ難行で、日本の美濃古窯や唐津などはこれに較べると、お嬢さんのハイキング・コースみたいなものだ。

翌日は河東と晋州ということで、疲れも軽くなったような感じである。河東の名は、上質純白のカオリン土のいわゆる河東土で、私たちにもお馴染みであるが、坦々たるハイウェイを一気に飛ばして、晋州を過ぎて先ず河東郡辰橋面白蓮里の部落を訪ねる。芋畑を通して丘陵の斜面に登ると、三島などの陶片にまじってツクヤサヤの窯道具も散らばっている。ここには青井戸めいたものもあったが、素地が迸っている。白蓮里はいかにも韓国の農村らしいのどかな部落で、吹き出る汗を拭いながら、春の頃にでも訪ねたらさぞ心楽しいことだろうと、その春景が偲ばれた。

昼食は晋州の町に出て摂ったが、河を挟んだ景観は晋州城も近くに望まれて素晴らしい。晋州地方の陶器は、聞き伝えでは茶陶に縁が深いようだが、ただ誰れもまだ確認した者がいないだけに、私としてはいっそう興味を惹かれるのだった。ある知人の話では、先年晋州の高校の資料陳列館の陶片を見てきたが、どうも日本でいわれているような手は無かった、ということ、そんなニュースをきかされると、いよいよ一度晋州へという念に駆られたものである。前記地理志によれば、晋州も官窯で、しかも数か所が挙がっており、有数の窯場地帯であることがわかる。しかも釜山とは余り遠くもない。訪ねた先きは晋陽郡水谷面孝子里で、ちょうど唐津の窯跡巡りでよく見かけるような農村風景であったが、途中の砂利道の悪路を三十分以上も飛ばしたのは、炎暑の折もあってすっかりこたえた。部落ではどこも家族総動員で、藺の採り入れ最中であつた。空地という空地は、路面までも刈取った藺をいっぱい敷き詰めて、乾していた。老人はけっこう日本語が判り、一応の話もできるの

で、田舎へ出かけるといっても、案じた程の不自由はない。ただ時節柄、見かけぬ不審な者が山をうろろすると、村民の通報で直ぐ警官がやって来る。現にこの孝子里の窯跡でも、今春大掛りな盗掘があり、地元の警察に全部没収されたそうである。しかし、ベテランの連中が目を付けるだけに、この窯の陶片には、資料として仲々面白いものがあった。堅手や三島の多いのは、他と共通であるが、そば形りのものがあったのは注目された。従来、そば、茶碗独特の俗にそば形りと呼ばれる、丈けは浅く、口は大きくて、見込みが広く一段くぼんでいる形のは、窯跡の陶片ではまだ発見されていなかったようであるが、この独特の姿は必ずどこかの窯にそのオリジナルが見出されるものと信じていた。青く上った、いわば青そば風の手であったが、有難かった。また熊川釉風の細かい貫入のある、やわらかい釉の手があったが、これはやはり風聞通り、やわらか手が晋州地方の窯で焼かれたことを確認させるもので、この釉はまた熊川釉とも言えるものであるから、熊川系の手もこの地方と縁がありそうで面白い。

今度の行は、窯跡調査には不都合な草の繁茂する夏でもあり、急の話なので、もっぱら下見程度にとどめたが、いずれ秋涼の好季ともなったら、今回は見合せた全羅南道の方へも足を延ばしてみたい積りである。戦前の日本人による調査は、今日では急激な開発の進展による変動のため、現地の面では御破算同様で、韓国学者の案内に俟つよりほかない現状であるが、これを機に徐々に現地研究の歩をすすめたいと願っている。韓国でも文化財の保護管理は強調されているが、ちょうど旅行中の八月八日にもこれをいっそう強化するとの指示が発表されて、一段この面でも緊張の度を加えてきたようである。